

拝殿新築事業

今市市山口 瀧尾神社

山田 龍太郎



今市市山口の鎮守さま、瀧尾神社は戦前旧大沢村の村社として山口の里人の信仰を集め、戦後は宗教法人となり人々の精神文化の象徴として崇められ、護持されてまいりました。

御祭神は主祭神である田心姫ヒメノミコト命を中心に、大己貴命オホナムチノミコト、味耜高彥根命アジスヒタケヒコノミコトをおまつりし、御神徳も、五穀豊穡、縁結び、子授安産、夫婦和合、家内安全、交通安全、病気平癒、土木開拓と大変豊かであります。

しかし当社殿は、古くから本殿のみで拝殿がありませんでした。

永年氏子の願いである、拝殿建築の話も、話題にのぼっては消えの繰り返しでしたが、昨年、手水舎を氏子並びに崇敬者により立派に建造し、奉納されました。その機会に再び話題に上がり、平成十四年度の氏子総会において、ついに拝殿建築が決まりました。

神社庁・関係諸官庁等の申請や許認可等の手続きを済ませ、めでたく去る三月二十七日拝殿予定地、及び仮殿予定地の地鎮祭を行うはこびとなりました。

事業の概要は次の通りであります。

一、拝殿新築及び本殿補修

二、参道の改修

三、末社の御祭神の確認及び補修

四、協賛者顕彰記念碑の建立

更に五月八日夜

多数の神職、氏子、崇敬者により、仮殿遷座祭も賑々しくとりおこなわれました。

現在は槌の音も高く十一月完成を目標に工事進行中であります。

完成に向け多数の方の物心両面のご芳志に深謝いたします。



山口瀧尾神社 拝殿建設地鎮祭

氏子青年会の紹介

◆宇都宮二荒山神社氏子青年会

会長 横山 伸太郎

当会は、今から四十四年前の昭和三十四年に設立され、私たちは、敬神崇祖の実践を目的とする県都、宇都宮の氏神様であります、宇都宮二荒山神社の各年間事業奉仕に参加、協力させていただいております仲間の会であります。

年間事業内容としましては、お正月の臨時神札授与活動及び、境内の警備奉仕に始まりまして、一月十五日、春渡祭の模擬店設置、内容は、日本酒、おでん、お汁粉の販売であります。この収益金は、神殿造営の協賛金として、積立しております。

二月十一日の建国記念奉



面神事での道路清掃奉仕、園児のお祭の絵を題材としての須賀祭絵画作品展の開催。

秋になりますと、十月二十一日の例大祭受付奉仕、十月の最終土曜日、日曜日に行われます、例大祭の付け祭りであります菊水祭への参加奉仕、この祭りは、鳳輦を中心とした行列で豪華絢爛でさながら時代絵巻を見るようであります。



祝式典並パレードへの参加。

栃木県神社庁教化委員会事業であります那須御用邸勤労奉仕。

六月中の日曜日に行います、境内の除草奉仕、これは午前八時三十分より雨天決行にて行います。

そして夏になりますと、七月十五日から二十日の間に行われます天王祭の親子神輿対親神輿渡御奉仕、市内各幼稚

そして冬になりますと、十二月十五日行われます、冬渡祭での模擬店設置、内容は一月十五日の春渡祭と同じであります。

そして年間事業の最終事業として十二月三十日に行います、餅搗き奉納です。搗いた餅は、神社に参拝にこられた方々への振る舞餅として配ります。

以上が私たちの会の年間事業ですが、このような神事、習慣などに触れ、神道の心、伝統文化を、神社興隆の為に良き伝統を継承していきたいと思っております。

◆ 黒磯神社氏子青年会

黒磯神社氏子青年会

会長 日 笠 義 隆

私達黒磯神社氏子青年会の歴史は、二十八年前に始まりました。この街の子供達の笑顔を見たいと「ふるさと再発見」の一連として、神輿の復活を願って、(社)黒磯那須青年会議所と黒磯市商工会青年部の共同で、事業が行われました。

当時の黒磯神社の神輿は、古く破損がひどい物であった為、地域住民から黒磯神社関係者と共に寄附を集め皆様の力で、神輿が復活されました。そのうち神輿渡御が行なわれ、子供達の笑顔が街に花を咲かせ、二団体によ

り黒磯神社氏子青年会が発足され、現在も二十〜四十歳の青年が運営を行なっています。今年も七月三十一日天王祭が行なわれ、先輩達が思いをこめて担いだ神輿を会員一同、心をこめて精一杯担ぎたいと思えます。この他に事業といたしまして、年越祭・歳旦祭には、神社に来ていただいた方々



に感謝を込めて甘酒を振舞わせていただいております。以上簡単ではありますが、紹介とさせていただきます。

今後とも黒磯神社氏子青年会に皆様の御指導御鞭撻を賜ります事をお願いすると共に、各氏子青年会のさらなる発展をお祈りいたします。

御用邸の奉仕作業に

参加して

芳賀町天満宮氏子青年会

元会長 荒井俊夫

新緑の那須御用邸へ、三度目の奉仕作業に参加いたしました。

初めての時は、御用邸はどんな立派な建物かと想像をしていましたが、邸内に入ると意に反し、自然の中にひっそりと佇む質素な歴史を感じる建物に安らぎを覚えると共に、ここで静養される両陛下のお姿が目には浮かぶようでした。

その年から機会があったら来年も来ようと思うようになりました。

そこには、日常の雑踏を離れ私たちの心を癒してくれるものがあるような気がしております。

邸内の山つつじや五葉つつじなども咲き、ウグイスも私たちを迎えて鳴いている中での、氏青の仲間たちによる作業は疲れもあまり感じませんでした。

今年は別邸に皇太子同妃両殿下並びに敬宮愛子内親王

殿下がご静養に来られましたが、両殿下におかれましても、ご公務ご多忙の中ですが、那須の自然の中でごゆっくりご静養されますことをお祈りいたします。

今日、私たちの便利な生活で、環境が悪化の一途を辿っています。

多くの人々の協力で、御用邸を守るのと同じように、私たちの神社の森を守り育てて行くことが、環境を守る

ことのできる一つであると考えながら、きれいになった御用邸を後にしました。

その後、温泉神社で反省会を行い、神社のご厚意により、鹿の湯の熱い温泉で汗を流し帰途に着きました。

最後に、神社庁並びに温泉神社の皆様には、毎年お世話になり、奉仕作業ができませんことに、心より感謝申し上げます。



神使シリーズ

フクロウ信仰 — しあわせを運ぶ神鳥 —

鷺子山上神社宮司 長 倉 樹



う御神木です。

鷺子山上神社の主祭神は天日鷲命アマノヒワシノミコトともうされる鳥の神様です。その大神様のお使い「フクロウ」にちなみ、不苦労御柱と呼ばれています。

この鷺子山上神社の「フクロウ信仰」が盛んになり出したのは、ほんの数年前からです。

フクロウという鳥は、古来、「梟雄」「梟悪」等の文字に使用されているように、日本では一部の例外を除き、凶鳥とされていました。

一方、西洋では「知恵の神」「森の哲学者」等と呼ばれ「幸福を招く鳥」として、古来より大切にされて来ました。

近年、我が国のフクロウに対する負のイメージが外国との交流が進むにつれ、大きく変わって来ました。

北海道を旅された方はご存知かと思いますが、お土産物店の「クマ」はほとんど無くなり、「フクロウ」があらゆる場所に幅を利かせています。また、日本国内のあちこちの旅先で、ちょっと

お土産物店に寄りますと、殆どどこにフクロウ製品が置かれています。

このフクロウに対する良いイメージを完全に定着させたのが、最近のイギリス人作家の作品「ハリーポッター」の大ヒットです。作品中のフクロウが幸せを運ぶ鳥であることが多くの日本人に知られ、フクロウに対する悪いイメージが消え、良いイメージが完全に定着しました。

このような影響か、数年前より当社でも「鳥の神様にちなんだフクロウの品物か御守がありませんか」と尋ねる方が増えて来ました。

古来よりの伝承や口伝を調査したところ、当社では古くより大切にされ、神鳥の間であることが確認されたので、参拝者の希望に応え、授与所にフクロウの置物や御守を準備いたしました。

これが大変好評であり、年々フクロウ関係の授与品が増えだし、地元小砂焼の「お願いフクロウ」等がマスコミに紹介されるなどもあり、さびしかった境内に少しずつ参拝者の数が増えだしております。

これは神社をあずかる宮司と致しましては、大変ありがたい感謝するところでもあります。又、「信仰とは何であろうか」と考えさせられることでもあります。

鷺子山上神社は平成十九年に鎮座千二百年を迎えます。

「フクロウ」は、祭祀の信仰と祭神の神徳を広げるよう大神様が派遣した神鳥に違いないと確信し、今後とも神職・氏子・崇敬者心を一つにして、神社の護持運営に励んでゆきたいと思っております。

下野の文化財散歩

山揚げ祭り

八雲神社宮司 黒崎 健二

永祿三年（一五六〇）今から四四〇余年前の話です。世は戦国時代で混乱しておりました。追いつちをかけるように伝染病が流行しました。勿論、医療機関は無く、重病患者は死を待つばかりに為す術もありません。そこで主だった人達が集まり、近くの大桶の地から疫病除け・厄除けの神である素盞鳴命（すさのおのみこと）様を勧請致しました所、猛威



山が揚げられ常磐津が演奏され踊りが演じられている

を振るっていた伝染病が薄紙を剥ぐように治ったと言ひ伝えられております。そこで踊りや相撲や操り人形等の余興を奉納致しました。これが山揚げ祭りの始まりであり、いつしか現今のような山揚げの形態に発展して参りました。

山揚げを執り行う為に宮座があります。宮座には若衆座、中老座、八雲講（年寄座）の三組織から成り立っており、奉賛講と呼ばれております。講長は宮司です。奉賛会長は責任役員がそれぞれ当ります。

七月一日御注連立式。夕刻に山揚げ奉告祭。二十日例祭。木曜日笠揃（宵祭）。金曜日神幸祭。土曜日渡御祭。日曜日還幸祭笠抜。月曜日お日待ち（直念）。三十一日輪っこくぐり等で夏祭りの日程が終わります。山を揚げるのは笠揃から笠抜までです。

山揚げは六町内によって、当番制で行われます。当番になると計画を立てたりするので一年間を要します。大変な作業は山作りです。山は竹を割って正月の凧のように網代に編んで烏山の和紙を幾重にも貼ります。組み立てるので四角形や三角形などいろいろあります。昔は山が大仕掛けの為、和紙を貼る糊に使った「うどん粉」の値段が上がったと言われております。

常磐津の三味線の音色に合せて町の踊り子達が演技を致します。山はその背景であります。観客の前の舞台から大山まで百メートルもあります。大山から前に中山、前山、館、橋、波等と配置されて遠近感が得られます。山を揚げるのに若衆百五十名を要します。

演技中、演題に合わせて山の背景を千変万化に成るように仕掛けが工夫されております。演技が終わるとお囃子の中、直ちに山を取り外します。山揚げの道具、屋台は次の場所へと移動します。

山揚げの上げ下げは若衆の木頭（役職）の拍子木の合図により一斉に動きまゝ。一条乱れぬ若衆の団体の行動は観光客の賞賛の的であります。伝統ある宮座の習慣、若衆座の習慣と仁義の口上など興味深い事ですが、与えられた紙面に言い尽くせませんので割愛致します。

全国でも類の無い山揚げ祭りは昭和三十四年栃木県重要文化財民俗資料第一号に指定され昭和三十八年に国選択の民俗資料として、昭和五十四年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

少子化で若衆の数が年々減少しており、百五十名の若衆を集めるのに戸数の少ない当番町では苦慮しております。然し「おらが誇れる山揚げ祭り」を何としても守りたいと言う事は町民の皆さんの気持ちが一一致しております。

百聞は一見に如かず。歴史上霊験著しい八雲神社に参詣かたがたご来町下さい。

編集後記

日本の気候風土は、四季折々の変化が実にはっきりとしているというのが特徴だろう。長い列島なので、季節の変化に遅い早いはずきものなのだ。さくら前線の時々刻々の変化はこれを如実に物語っている。しかし、夏がくれば全国至る所全く同じになってしまう。

そして、夏まつり祇園祭の到来である。全国約八万の神社が一斉に神輿を繰り出す。最近では、黒漆塗り飾り金具の神輿だけが幅を利かせているが、白木造りの神輿も鎮守の森から繰り出して、田の畦道を駆け抜けていったのである。今は事情が少し異なっている。しかし、「こころ」は一つ。疫病の蔓延する猛暑の折に、悪霊退散・無病息災を願って活力元気の祭典は、全国一ところなのである。祭典の地域差、軽重・深淺こそあれ、惟神（かなながら）の道という底流は脈々として力強く流れていると信じている。

編集委員長 小堀 修一

編集委員
柳田 文司、小野寺建富
増淵 文男、小幡 正之
板垣 彰、斉藤 恵子
堀口 邦夫